

外国人の日本語話しことばに対する 日本人評価の多様性を探る： 質問紙による量的調査

国立国語研究所

宇佐美洋，森篤嗣，
野原ゆかり，吉田さち

研究の背景

- 非母語話者の言語運用に対し、母語話者がどのような評価を行うかについての研究
 - Hadden(1991), Okamura(1995), 田中・坪根・初鹿野(1998a), 田中・初鹿野・坪根(1998b), 渡部(2005), 野原(2008)等
 - 「教師による評価」と「一般母語話者による評価」の対比→属性による比較
- 同じ属性を持つ人々同士の間でも、評価を行う際の基本的方針(評価フレームワーク)のあり方は実に多様
- 「評価の個人差」に重点を置いた研究は少ない

評価フレームワークの類型化に関する研究

- 外国人の**日本語作文**に対する母語話者の多様な評価のあり方の中から、**類型を見出そうとする研究**
 - 宇佐美・森・吉田(2009), 宇佐美(2010)
 - 研究の手順
 1. 文章評価についての大規模な**量的(質問紙)調査**
 2. 統計的手法による**評価者の分類(グルーピング)**
 3. 各グループの特徴を顕著に表わす**評価者を抽出し, 質的手法により, 評価のプロセス**を詳細に分析
 4. 統計的手法による**評価者分類の見直し**

今回の調査

- 「外国人の日本語発話」を対象に、同様の調査研究を実施(まずは量的調査から)
- 評価対象:日本人・外国人間の**ロールプレイのビデオ録画**
 - ただし、録画されているのは外国人側。日本人側の発話は録音のみ
- 調査対象者:日本語母語話者92名
 - 外国人との**接触頻度高群**42名(ボランティア日本語支援者等)
 - 外国人との**接触頻度低群**50名(業務上・生活上,外国人との頻繁な接触を持たない一般人)
- 調査時期:2010年12月から2011年2月

ロールプレイ課題

雑談

- これから同じ職場で仕事をするようになった日本人と外国人(ほとんど初対面)が、挨拶・自己紹介をした上で雑談をする。


交渉(罰金)

- 同じ団地に住む日本人と外国人との会話。その団地では住民参加の草刈りを実施しており、不参加の場合は罰金を払わねばならない。自治会役員である日本人が、草刈りに不参加であった外国人の部屋を訪れ、罰金を払ってもらうための交渉を行う。


1課題につき5録画を調査に使用。1つの録画の長さは3～7分程度

調査手順

評価者はPC上で録画を視聴し、各録画
に対し評点をつける(7段階)



同課題にもとづく5種類の録画に対し、
順位をつける(1位～5位)



評価の際、「どのような評価観点を、ど
の程度重視したか」を問う質問紙に回
答(評価観点は予備的インタビュー調査
から抽出)


質問項目例(雑談)

01. 日本人側の目を見て話しているか
02. 発音になまりがあるか
03. 日本人側の話をきちんと理解できているか
04. 顔の表情
05. 手の動き...

- 評価時これらの項目を、「まったく考慮しなかった」: 0, 「非常に考慮した」: 6, として7段階で回答
- 項目数は, 雑談31項目, 交渉33項目(うち25項目は両場面に共通)

分析手順

「評価観点重みづけ」に対する回答を因子分析にかけ、各評価観点到影響を及ぼす潜在因子を抽出



それぞれの因子について、評価者ごとに因子得点を算出



その因子得点に対しクラスタ分析を実施、評価者グルーピングを行う

「雑談」評価観点 因子分析

- 「雑談」の評価観点に関する質問紙回答に対し、SPSS17.0を用いて因子分析(プロマックス回転)
- スクリー基準によれば因子数は6となるが、解釈可能性を考え、最も適切な因子数として5を採用(重みづけのない最小二乗法)
 - 因子パターン行列:別添資料1
 - 因子間相関表:別添資料2

「雑談」因子命名

第1因子

• やり取りにおける積極性

第2因子

• 日本語のうまさ

第3因子

• 聞きやすさ

第4因子

• 人柄・共感

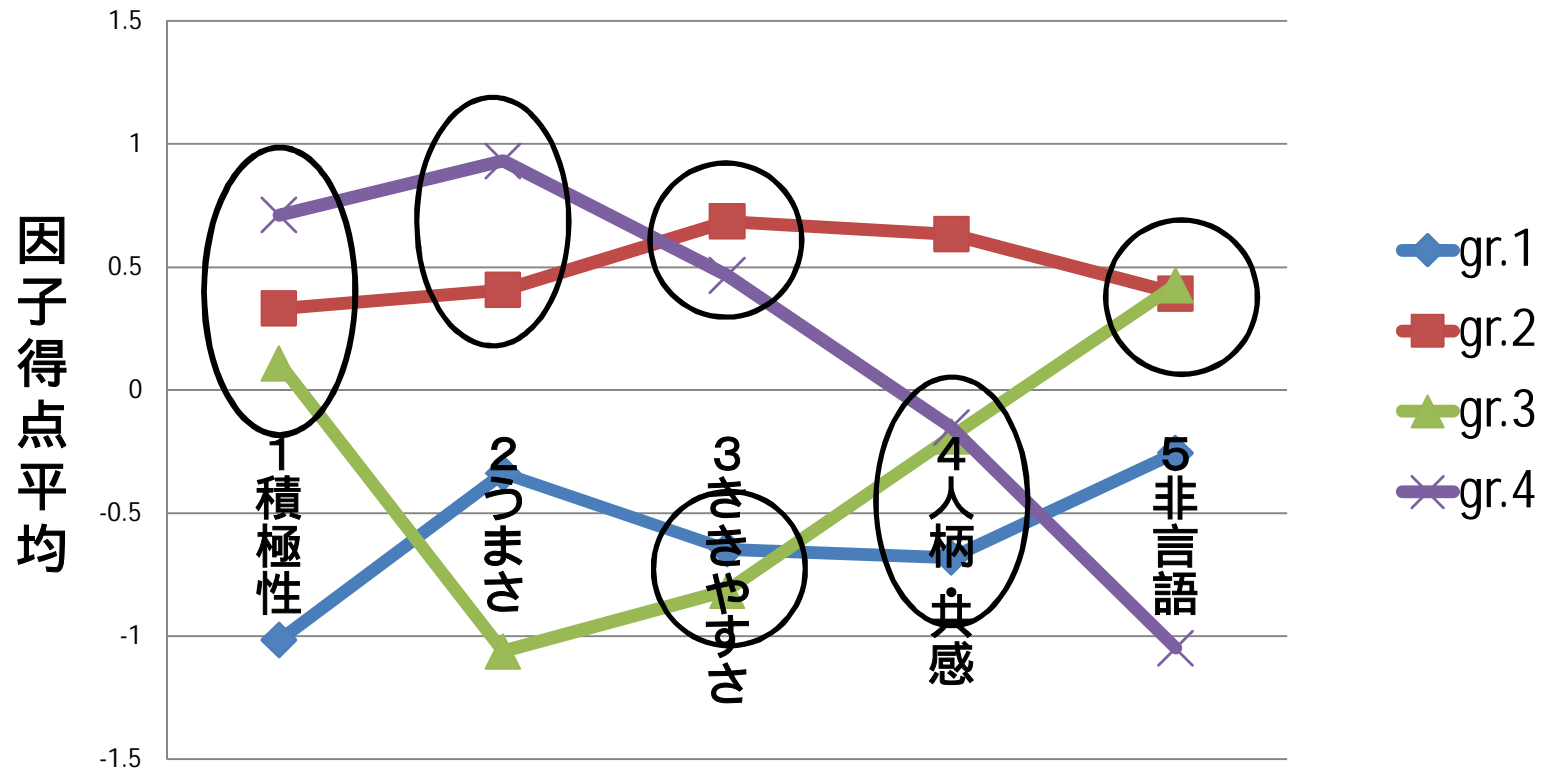
第5因子

• 非言語的要素

「雑談」クラスタ分析

- 各評価者ごとに、前記5因子について因子得点を算出
 - 21項目に対する各評価者の回答傾向が5つの数値に要約されたことに
- 因子得点に対してクラスタ分析を実施
 - 平方ユークリッド距離, Ward法採用
- クラスタごとの特徴を最も解釈しやすいクラスタ数として4を採用

グループごとの因子得点平均値プロット



グラフ中楕円で囲まれている平均値同士には有意差なし
(分散分析後, テューキーの方法による多重比較実施)

各グループの特徴

第1グループ: 弱負荷型

- どの因子からの負荷も少ない(特に【積極性】から負荷が有意に少ない)

第2グループ: 強負荷型

- どの因子からも負荷も高い(特に【人柄】からの負荷が有意に高い)

第3グループ: 【言語】非重視・【非言語】重視型

- 【日本語のうまさ】【聞き取りやすさ】からの負荷が有意に低く, 【非言語】からの負荷が高い

第4グループ: 【非言語】非重視型

- どの因子からの負荷も高めだが, 【非言語】のみ顕著に低い(【人柄・共感】も低いように見えるが, 他グループとの有意差はない)

「交渉」評価観点 因子分析

- 「交渉」の評価観点に関する質問紙回答に対し、同様に因子分析(プロマックス回転)
- スクリー基準によれば因子数は3となるが、解釈可能性を考え、最も適切な因子数として4を採用(重みづけのない最小二乗法)。さらに、どの因子からも負荷量の少なかった2項目を除いて再分析
 - 因子パターン行列: 別添資料3
 - 因子間相関表: 別添資料4

「雑談」因子命名

第1因子

• 日本語のうまさ

第2因子

• 交渉の進め方

第3因子

• 全体的印象

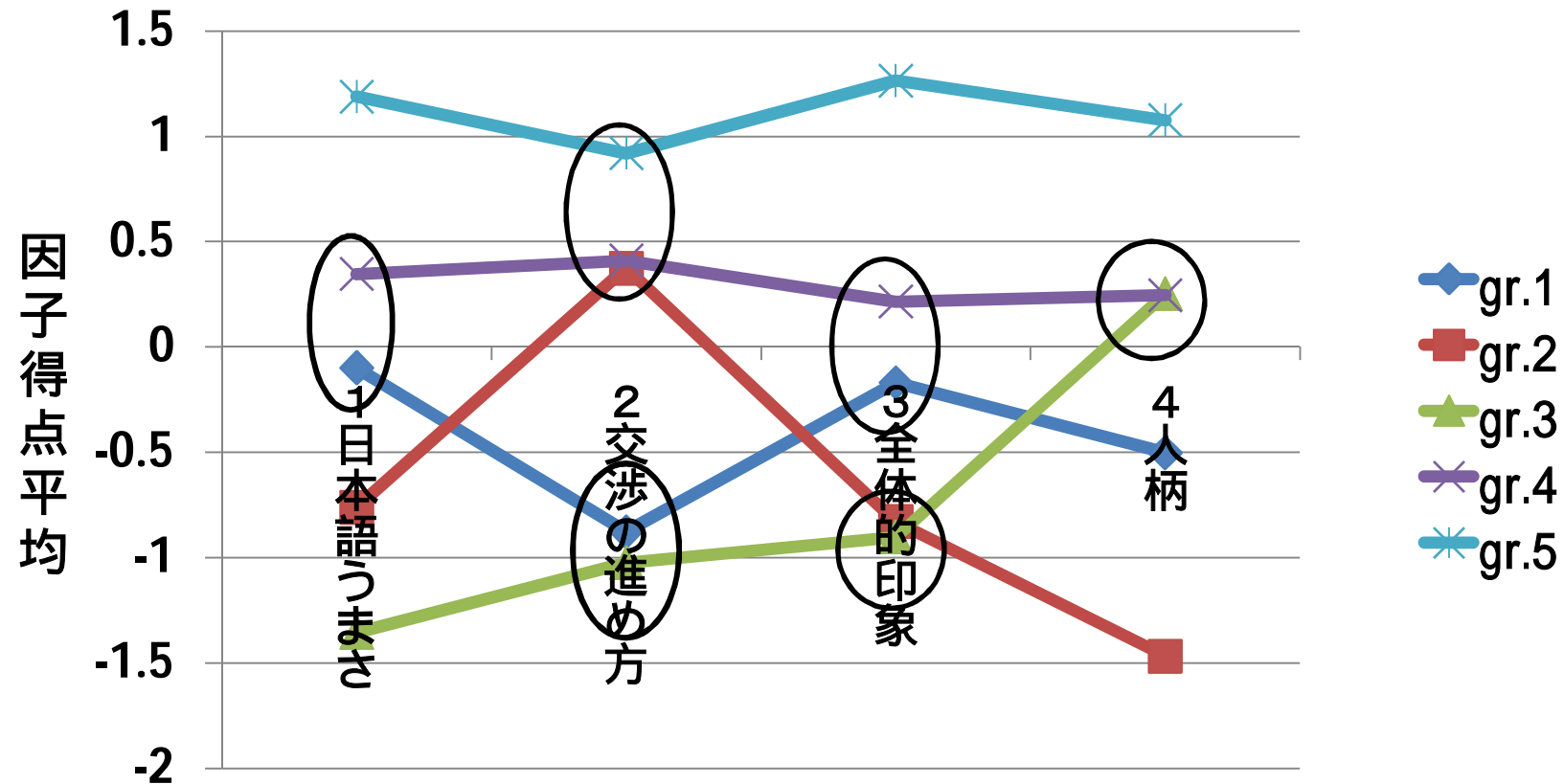
第4因子

• 人柄

「交渉」クラスタ分析

- 各評価者ごとに、前記4因子について因子得点を算出し、クラスタ分析実施
- 因子得点に対してクラスタ分析を実施
 - 平方ユークリッド距離、Ward法採用
- クラスタごとの特徴を最も解釈しやすいクラスタ数として5を採用

グループごとの因子得点平均値プロット



グラフ中楕円で囲まれている平均値同士には有意差なし
(分散分析後, テューキーの方法による多重比較実施)

各グループの特徴

第1グループ: 弱負荷型

- どの因子からの負荷も少ない(特に【人柄】からの負荷が少ない)

第2グループ: 【交渉】重視型

- 【交渉】からの負荷が高く【人柄】からの負荷が少ない

第3グループ: 【人柄】重視型

- 全体的に負荷が低いが, 【人柄】からのみ有意に負荷が高い

第4グループ: 中負荷型

- どの因子からの負荷も中程度

第5グループ: 高負荷型

- どの因子からの負荷も高い

全体を通しての考察

- 「雑談」「交渉」双方の場面で共通に抽出される因子は【日本語のうまさ】【人柄】
 - 「雑談」では【人柄】に対する反応に大きな違いはなかった(3グループについて有意差なし)が、「交渉」においてはグループ間の違いが出た(「交渉」においては【人柄】を重視しないグループあり)
- 【非言語的要素】は、「雑談」においては独立因子として抽出されたが「交渉」では抽出されず、【全体的印象】としてひとくくりに
 - 「交渉」では回覧板という小道具を使ったため、視線が回覧板に向かう場合が多かったことによるものか？

注目すべきグループ

- 「雑談」のgr.3とgr.4
 - gr.3は【うまさ】非重視，【非言語】重視
 - gr.4は【うまさ】重視，【非言語】非重視
- 「交渉」のgr.2とgr.3
 - gr.2は【交渉】重視，【人柄】非重視
 - gr.3は【交渉】非重視，【人柄】重視
- こうしたグループの特徴を顕著に示す評価者を抽出し，評価のプロセスを今後詳細に分析していく予定

参考文献(1)

- 宇佐美洋(2010)「文章の評価観点に基づく評価者グルーピングの試み - 学習者が書いた日本語手紙文を対象として」『日本語教育』147号, 112-118.
- 宇佐美洋・森篤嗣・吉田さち(2009)「「非母語話者の書きことば」に対する日本人の評価観をめぐる量的調査」『社会言語科学第24回大会 論文集』, 228-231.
- 田中真理・坪根由香里・初鹿野阿れ(1998a)「第二言語としての日本語における作文評価基準 - 日本語教師と一般日本人の比較 - 」『日本語教育』96号, 1-12.
- 田中真理・初鹿野阿れ・坪根由香里(1998b)「第二言語としての日本語における作文評価 - 「いい」作文の決定要因 - 」『日本語教育』99号, 60-71.

参考文献(2)

- 野原ゆかり(2008)「発話の「分かりやすさ」を判断する要因 - 一般日本人と母語話者日本語教師の比較を通して -」『人間文化創成科学論叢』第11巻, 165-174, お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科
- 渡部倫子(2005)「日本語学習者の発話に対する日本語母語話者の評価 - 共分散構造分析による評価基準の解明」『日本語教育』125号, 67-75.
- Hadden, B.L. (1991) Teacher and Nonteacher Perceptions of Second-Language Communication, *Language Learning*, 41, 1-24.
- Okamura, A. (1995) Teachers' and Nonteachers' Perception of Elementary Learners' Spoken Japanese, *The Modern Language Journal*, 79, 29-40.